

国内事例
in Japan

2

豊かな暮らしが生物多様性保全につながる ——ネイチャーポジティブの実現に向けた 企業の取組／積水ハウス株式会社



「5本の樹」のある暮らし

私たちの暮らしや事業活動は、自然の供給能力を大きく上回る形で国内外の生態系サービスに依存して成り立っている。自然との持続的な関係を築くには、私たちの考え方、経済活動、そして暮らし方の捉え直しが全世界的に求められている状況にあると言えるだろう。

特に2021年のG7サミットで約束された、2030年までに生物多様性の損失を止め回復軌道に乗せる「ネイチャーポジティブ」を実現するために民間企業の果たす役割は大きく、生物多様性保全の取組への民間企業の主体的な参画の重要性がますます高まっている。

今回事例として取り上げる積水ハ

ウス株式会社では、約20年前から「5本の樹」計画と銘打ち「3本は鳥のため、2本は蝶のために、地域の在来樹種を」という理念のもと環境への取組が行われており、これまでに植栽された樹木は全国累積で1810万本（2021年度）にもものぼる。昨今では環境省が実施する「自然共生サイト（仮称）」認定実証事業への参画において、琉球大学久保田研究室・株式会社シンクネイチャーとの共同検証でこれまでの約20年間で植栽した樹木データを分析し構築した生物多様性保全再生に関する定量的な実効性評価の仕組みである「ネイチャーポジティブ方法論」の公開で注目を集めている。

大手ハウスメーカーとして環境への取組を今日まで継続して推進してきたその背景や現在の実感、そして今後の展望について、積水ハウス株式会社ESG経営推進本部環境推進部の八木氏にお話を伺った。

すべてにおいて 環境を優先させる

積水ハウスの環境への取組の歴史は長く、その始まりは1999年に業界に先駆けて発表した「環境未来計画」にある。以来、積水ハウスは人にも地球にもやさしい、永く住み継がれていく住環境の創造を目指してきた。

八木氏曰く、当時から住居設計が

ら外観施工まで一気通貫の家づくりを手掛けていたハウスメーカーとして、庭づくりを起点とした生物多様性保全へ向けた取組を検討したのは自然な流れだったという。

しかし、「鳥や蝶のために庭に木を植えましょう」という伝え方ではなかなか購入者には響かない。そこで、生物多様性が豊かな庭ができることで、そこに暮らす人にとってどのような良いことがあるか、どのように暮らしが豊かになるかといったことの模索が、社内関係者や社外専門家、自然保護活動家といった幅広いステークホルダーの間で行われた。そこでハウスメーカーとして目指す心地よい住環境のイメージが整理され、ひいてはそれが生物多様性保全につながるというストーリー性をもった訴求が購入者に届くようになり、「5本の樹」計画が同時にブランドのコンセプトとして社内外に定着していった。「庭は楽しめないと続かない。楽しみながらしっかりと環境にもいい。人がその暮らしを楽しめて初めて、守っていかうという意識が生まれるのだと思います。」と八木氏は語る。

都市部の緑が里山をつなぐ生態系ネットワークの結節点になる

生物多様性保全に取り組むにあた

り、稀少種を守る活動の一步手前の入口として、身近な緑や生態系の大切さを身近で感じ取れる場所としての庭が重要な役割を持つ。

庭を住まいの中の小さな自然と捉え、その「点」にやってくる鳥や蝶、虫などの生きものの豊かなつながりが街の中で連続して「線」となり、さらに里山など地域の自然とつながることで都市部の「生態系ネットワーク」を形成し、「面」的な生態系保全への貢献につながる。生きものたちの循環が生まれ、その生息域が広がることで地域の生態系が豊かになる。

こうした都市部の生物多様性保全活動の効果を定量的に捉え、その意義を広く発信し取組の普及を図るために定量評価の仕組みが構築された。積水ハウスの約20年の取組で蓄積された経験知と、研究機関のもつ知見の融合でつくられた仕組みにより、生物多様性保全の取組のさらなる推進が期待される。

社会的価値の追求と体験を通じた実感知の醸成

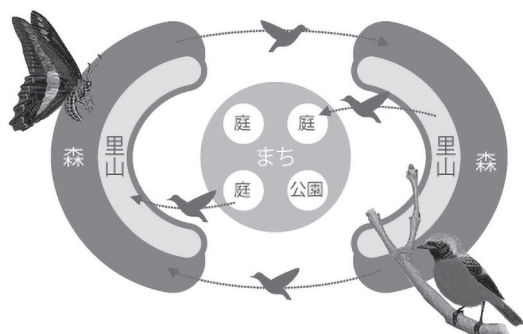
定量化ができたことで、在来種を中心に植える「5本の樹」計画の活動に効果があると科学的に裏付けられた。これをさらに広げていくためにはどうしたら良いか。今後の展望

として2点挙げられる。

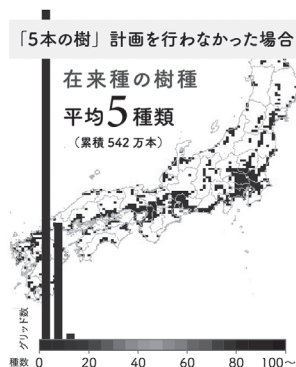
ひとつは、人の暮らしや地域社会への貢献といった社会的価値を定量的に見せられるようになること。社会の変化と相まって、今後生物多様性に対する取組やそこから生まれる商品に対する評価が変わってくるであろうという実感のもと、その社会的価値の定量的な評価が可能になることで生物多様性に対する真摯な活動の加速化に繋がると八木氏は語る。

もうひとつは、環境教育の取組だ。生物多様性保全の必要性やその意義を伝えることは、簡単な言葉にしようとするほど難しい。やはりその地域にある樹木や生きものの観察を通じた体験や実感が重要であり、それには普段の生活の中で生物多様性を感じられる場所がどれだけあるかがポイントで、その役割を担うのが企業緑地や庭の樹木などの都市部の緑であると八木氏は続ける。

生態系という大きな枠組みの中で営まれる人の暮らしを見つめ直すことが、ネイチャーポジティブ実現へとつながる確かな糸口となると取材を通して感じた。



都市部の「生態系ネットワーク」イメージ



「5本の樹」計画の効果

